

漢字整理案の説明

漢字整理案は尋常小學校で用ひて居る第一種、第二種の讀本及び書き方手本・修身書並に歴史・地理・理科・算術等の各教科書に於ける漢字二千六百餘字に就いて整理したもので、其中第一種、第二種の讀本及び書き方手本・修身書は木版・歴史・地理・理科・算術等に関するものは活版である。

今我が國で慣用されて居る漢字の字形には、統一を缺いて居るものがあり、或は時代に變遷もあつて、その標準の一定しない場合が多い。これが爲め人々が其の據るところを知らぬに苦しんで居る。例へば字典では獨體が兼で合體が廉鎌である場合もあり、即即、既既、概概、櫛のやうに自、自、良三體を併用して居る場合もある。又戲戲、鷄雞、鳥

島嶋、携携携携、携携携携の如く同字で數體あるものもある。活字にも亦備備、並並、勇勇、勢勢勢勢のやうに、同字で種々な字形の並び用いられて居るものがある。故に教科書に現はれて居るものも區々で、教授上困難を感ずることが少なくない。のみならず中には稍煩冗に失するものもあるから、之に整理を加へることは、國民教育上漢字教授の徹底を期する爲、目下の急務である。

本案に於ける整理の方針は、簡便を主とし、慣用を重んじ、統一を旨とし、活字體と手書體との一致を圖るにあり、ので、整理上の要目を擧げると左の通である。

- 一、字畫の簡易なものを採ること。
- 二、運筆の便利なものに従ふこと。
- 三、字形の釣合を整へること。

四、小異の合同を圖ること。

今其の各項に就いて、左に説明して見よう。

一、字畫の複雑なものは成るべく之を簡易にする必要ハ言ふまでもない。康熙字典に繁簡兩體を存するものは、事情の許す限り其の簡易な方に従つた。例へば刑刑、晉晉、決決に就いて刑、晉、決を採つた類である。又字典にないものでも他に典據を求めて勉めて簡易なものに従つた。例へば繩、蠅、竈に就いて繩、蠅、竈を採つた類である。

二、運筆の便不便といふことは、固より人々の習慣に基くものであるが、本案では大體社會の慣用に重きを置き、便宜なるものに従つた。其の例左の通。

字典體

勻

標準體

勻

字典體

半

標準體

半

三

内 羽

内 羽

雨 亞

雨 亞

三、文字の結構に就いて見ると、扁旁冠脚の鈞合が宜しきを得ないものや結體の窮屈なものがある。此等は學習上の便を圖つて整理した。其の例左の通。

字典體

默 獲

標準體

默 獲

字典體

勳 闊

標準體

勳 濶

四、文字中互に相類似して一點一畫の極めて微細な差異によつて分れたものがある。此等のもので一般の慣用上から見て、何れかに併合して別な誤解を招く恐れがないのみならず、却て學習上の便益を増すやうなものは之を併合した。

字典體

標準體

字典體

標準體

月(前)

月(前)

戌

戌

月(胃)

月(胃)

戌

戌

月(明)

月(明)

巳(危)

巳(危)

母(每)

母(每)

巳(改)

巳(改)

母(貫)

母(貫)

巳(記)

巳(記)

母(毒)

母(毒)

巳(起)

巳(起)

但し母、己の獨體はそのまゝである。

以上の要目に依つて字形を整理するに就いては、勉めて獨斷に陥ることを避けて其の典據を廣く和漢の字書類又は碑帖等に求めた。

又現行の活字に就いて見ても、門、恙、廿、廿冠の如きは既に本案の標準字體と同一で多くの印刷所の字母も皆一

致して居るし、寫、片、鼻の如き字體も既に之を使用して居る所もあるから、本案の標準字體は必ずしも今新に定めたものでない。

右は大體整理上の要目を説明したのであるが、尚其の細目に就いて敷衍して見ると次の通である。

一、縦線を挑ねたもの

例

字典體 木、門

標準體 木、門

康熙字典では木、禾、米のやうに中央にある縦線、門、鬥のやうに右側にある縦線は何れも筆を押さへたまゝで挑ねて居ない。ところが水、手、寸、竹などの縦線は皆挑ねて居る。このやうな縦線は運筆の上から見ても、習慣上から見ても挑ねた方が適當である。

二、縦線を縮めたもの

例

北、恙 字典體

北、恙 標準體

右は一般の慣用に従つて改めたもので、書を書に、唐を唐に又周を周にしたのも同様である。

三、縦線を伸したものの

例

角、鼻 字典體

角、鼻 標準體

右も亦一般の慣用に従つて改めたもので、袴の弓と弓に、號の号と号にしたのも同様である。

四、横線を縮めたもの

例

虜、得 字典體

虜、得 標準體

右も亦一般の慣用に従つて改めたものである。

五、畫數を減じたもの

例

盜、寫 字典體

盜、寫 標準體

右は簡便に従つて改めたもので、者^ハと者に會と會に、
奥と奥にしたやうなものも同様である。又えと之に、
會と會に、曾と曾に改めたやうなのは其の畫數が
減つたばかりでなく、運筆も便利になつて居る。

六、畫數を増したものの

例

片、步

片、步

字典體

標準體

右は慣用と學習の便利とを考へて改めたもので、臣、卑、
厚、歲、冤、縣、懸、馱、を臣、卑、厚、歲、冤、縣、懸、馱
にしたのも同様である。

七、運筆を變へたもの

例

雨、益

雨、益

字典體

標準體

右は運筆の上から改めたもので、公と公に、分と分に四と
四に、姫と姫にしたのも同様である。

八、配合を變へたもの

例

闊染

字典體

濶染

標準體

右は字形の結構を整へ、鈞合をよくする爲に改めたもので、點を點に、樵を樵に、護を護にしたのも同様である。

九、統一を圖つたもの

例

尸(屋)

字典體

尸(尺)

標準體

尸(刷)

尸(尺)

虫(惠)

虫(專)

虫

虫(專)

虫(惠)

右は同字の形が其の組合せに従つて區々になつて居るのを統一したもので、此の例は非常に多い。これに二通あつ

て其の一は字典に在る一つの形そのままで統一したものの例へば尸、尸、尸、尸を尸に、示、示を示にしたやうなものである。其の二は字典に在る一つの形に幾分の整理を加へたもので統一したものの例へば亾、亾、亾、亾、亾を亾に、亾、亾、亾を亾に、亾、亾を亾にしたやうなものである。

十、併合を行つたもの

例

	字典體		標準體
月	(前)	月	(前)
月	(胃)	月	(胃)
月	(明)	月	(明)
西	(霸)	西	(霸)
西	(栖)		(栖)
西	(乘)	西	(乘)

右は異字で形の類似して居るものを併合したので、此等の

外、办(梁)刃(忍)刃(劔)も、刃(梁、忍、劔)に、采(採)采(番)と采(採、番)に、たやうなものある。

十二、二體以上の一を採つたもの 例

字典體

標準體

垂 垂 猪 猪 猪 垂 垂



猪



垂

右は同字に二體以上あるものに就いて、其中最も慣用され
て居る一體を選んだので、それにも字典に在る一つの形その
まゝを採つたものと、それに幾分の整理を施したものと二
通ある。決決の中決と、富富の中富と、澀澀の中澀と採つたやうなものは前者の例で、
器器の中

器き、猫猫の中猫き、松采松の中松を採つた
やうなもののは後者の例である。

上

立字音に従つて形を改めたもの例 查字典體 萌 查標準體 萌

右は字音に従つて改めたもので、查を曾にしたのも同様
であるが、此等の外には至つて数が少ない。

以上は十二項目に對する説明である。

又整理の結果として字典の部首部屬の多少變つた
ものがある。即ち、

一、部首の無くなつたもの、

これは左の二つである。

ㄨ 字典のㄨはㄨに併合

又 字典の又は又に併合

口部首の字體の變つたもの。

これは整理案に出て居る各字に依つて明らかであるから別に掲げない。又從來の順序が變つたものもあるが、これは

整理案の部首索引に譲つて置く。

ハ部屬の變つたもの。

檢索の便宜上總て之を左に掲げて置く。

標準體

内 兩 全 舎 危 卷

字典部首

入 部 入 部 舌 部 尸 部 尸 部

整理案部首

人 部 人 部 人 部 人 部 巳 部 巳 部

潤 茲 史 着 厩 舒 奇 寃 寇 寫 宜

門	玄	白	艸	广	舌	大	冂	宀	宀	宀
部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部
シ	么	日	目	厂	口	口	宀	冂	冂	冂
部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部

以上は大體漢字の整理に關する要旨に就いて説明したものであるが、凡例に出て居て既に意味の明瞭であるものは此に

は述べない。

尚本案に掲げた標準字以外、一層簡易な字體が普通に用ひられて居るものもあるが、その用否に就いて世人の見所が區々になつて居るから、今その中適當と認められたものを採つて許容字として本案に附載した。此等の中同字で二つ以上の形が行はれて居るものは、簡便を主とする方針に由つて適宜一體を採用するに決した。

大正八年十二月二十日印刷
大正八年十二月二十五日發行

文部省普通學務局

印刷者

七條

愷

東京市神田區佐久間町一丁目一番地

印刷所

金屬版印刷所

東京市神田區佐久間町一丁目一番地